『金剛手灌頂タントラ』の瓶水灌頂の役割について

駒　井　信　勝

1．はじめに

『金剛手灌頂タントラ』(Tib.Lag na rdo rje dbang bskur ba'i rgyud chen po, Skt. Vajrapāṇyabhiṣekamahātantra）は，漢訳された記録がなく[1]，チベット訳のみが今に伝わっている経典である。そのため，あまり注目されて来なかったが，酒井（1962）によって『大日経』の先駆経典と位置づけられ[2]，その後大塚（2013）によって『真実摂経』との関連も指摘[3]されている，日本における中期密教の成立を考える上で重要な経典である。

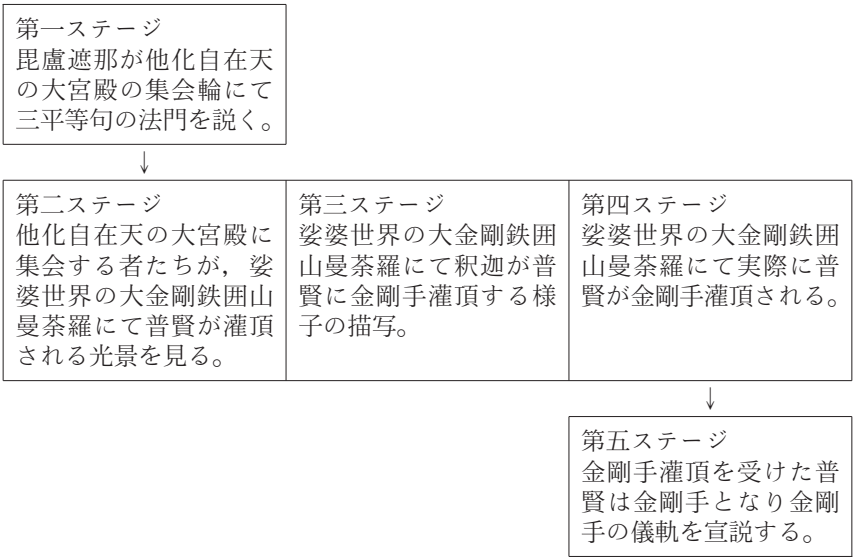
『金剛手灌頂タントラ』の灌頂儀礼において最も特徴的なことは，受者に金剛杵を授与することによって，その受者を金剛手に転換させること[4]と言える。金剛杵の授与が『金剛頂経』に先駆けて現れることが注目され，その意義については既に幾つかの論文において報告されている[5]。またこの所作は，日本の真言宗における灌頂儀礼でも重要な役割を果たしていることは言うまでもない。

以上のことから，本経の灌頂儀礼の特徴や，その意義について語る場合には，金剛杵の授与に対する考察が最重要視されてきた。一方，灌頂儀礼の中核をなす瓶水灌頂についての言及は，ほとんど無いのが現状である。そこで小稿では，『金剛手灌頂タントラ』の瓶水灌頂に注目し，その意義について考えてみたい。

2．灌頂の目的について

2-1. 灌頂儀礼の目的

『金剛手灌頂タントラ』の灌頂儀礼は，釈迦が普賢に対して灌頂を行い，それによって普賢が金剛手に転換する。次に，それを現実世界に投影させた形で阿闍梨から弟子への灌頂が，金剛手によって説かれるという二重構造になっている。大塚（2013, pp.962-970）によれば，この場面はおよそ五つに分けることが出来る。



このように，「娑婆世界の大金剛鉄囲山曼荼羅おける釈迦から普賢への灌頂」が説かれ，その後にそれを拠り所とした「現実世界における阿闍梨から弟子への灌頂」が説かれる二重構造になっている。

以上のことから，まずは釈迦から普賢への灌頂がどのような目的で行われたのかを確認する必要があるであろう。以下に第三ステージに見られる灌頂の場面を引用したい。

de nas 'jig rten gyi khams mi mjed 'dir/ bcom ldam 'das shā kya thub pa'i mtshan gyis gling bzhi pa bar ma'i 'jig rten gyi khams kyi 'dzam *bu'i (D;bu P) gling du bdud pham par mdzad nas/ byang chub mngon par rdzogs par sangs rgyas te/ dga' ldan gyi gnas na gnas pa nas bzung ste/ mthar gyis spyad pa spyod cing yongs su mya ngan las 'das pa chen po'i mtha'i bar du byin gyis brlabs nas chos bstan to// bcom ldan 'das shā kya thub pa de yang bstan pa rgyun mi 'chad pa'i phyir/ byang chub sems dpa' kun tu bzang po dang/ byams pa dang/ 'jam dpal dang/ spyan ras gzigs kyi dbang phyug dang/ sgrib pa thams cad rnam par sel ba dang/ nam mkha'i snying po dang/ sa'i snying po dang/ byang chub sems dpa' ngan song thams cad spong ba la sogs pa byang chub sems dpa' rnams bsdus nas/ lha dang/ klu dang/ gnod sbyin dang/ dri za dang/ lha ma yin dang/ nam mkha' lding dang/ mi 'am ci dang/ lto 'phye chen po la sogs pa thams cad kyi mdun du/rdo rje'i dkyil 'khor chen po bris nas/ lag na rdo rje dbang chen po bskur bas byang chub sems dpa' kun tu bzang po dbang bskur nas de nyid la dstan pa gtad do// (D ff.10v7-11r4, P ff.11r5-11v2)

【試訳】その時この娑婆世界に於いて［世尊毘盧遮那は］，世尊釈迦牟尼の姿によって，四州の中の世界の閻浮堤に於いて，降魔して，菩提を現等覚して，兜率天の住処に住することか

ら始めて，次第に行を行じて大般涅槃に至るまでを加持して法を説いたのである。世尊釈迦牟尼はまた，教説の相続を絶やさないために，普賢菩薩と弥勒と文殊と観自在と除一切蓋障と虚空蔵と地蔵と除一切悪趣をはじめとする菩薩たち[6]を集め，天と龍と夜叉と乾闥婆と阿修羅と迦楼羅と緊那羅と摩睺羅迦をはじめとする全ての前で，大金剛曼荼羅を画き，金剛手大灌頂によって普賢菩薩を灌頂して，彼自身に教説を委嘱したのである。

この引用文は世尊毘盧遮那が，娑婆世界においては釈迦の姿で現れ，そこで普賢菩薩に灌頂を行うところである。下線部に注目すると，この灌頂は教説の相続を絶やさないために行われたことがわかる。そして，教説の相続を絶やさないために，どのような手段を用いたかというと，灌頂儀礼によってその教説を普賢菩薩に委嘱したのである。つまり，この後金剛手が教主となり説いていく経典の内容は，釈迦より相承した教えであり，その教えを説くことは灌頂を授かった普賢，すなわち金剛手に任されたこととなる。

2-2. 金剛手が教主になることについて

『金剛手灌頂タントラ』では，上記のように金剛手が釈迦の教説の相承者であり，さらに金剛手が教主となってそれを説くことの正当性を主張しているといえる。次にここでは，金剛手の正当性を主張する理由を探りたいと思う。『金剛手灌頂タントラ』には以下のような記述が見られる。

de nas bcom ldan 'das rnam par snang mdzad kyis byang chub sems dpa' lag na rdo rje la bka' stsal pa/ lag na

rdo rje nga'i slob ma rmans ma gtogs par khyod kyis su la *bsnyad (D;snyad P) par mi bya'o// de ci'i phyir zhe na/ sems can ma dad pa de dag ni tshul 'di la yid mi ches shing de dag 'di skad du/ 'di ni sangs rgyas kyis gsungs pa ma yin no zhes smra bar 'gyur bas/ de dag gi rna lam du yang bsgrag par mi bya na phyag rgya lta ci smos/ (D ff.141r6-141v1, P f.141r3-5)

【試訳】その時，世尊毘盧遮那は金剛手菩薩に教勅した。金剛手よ！私の弟子たち以外に，汝は誰であれ説くべきではない。なぜならば，彼ら信のない衆生たちはこの理趣を信じず，次のように「これは仏によって説かれたのではない」と語るからである。よって彼らの耳に告げるべきではない。まして，印を説くべきでない。

ここでの主張は，信のないものにその教説を示してはいけないことである。その理由として，「これは仏によって説かれたのではない」と疑われることを挙げている。これは，本経が「仏説ではない」と批判されていたことのあらわれとも考えられる[7]。『金剛手灌頂タントラ』には，このように仏の教説ではないとする信がないものに教説を示すことを禁じている記述が幾つか見られる[8]。すなわち，金剛手が教えを説く経典[9]に対して，それらが「非仏説」であると認識していた者が当時実際にいたのであろう。このような意味においては，この灌頂儀礼の記述は，金剛手の権威付けを行っているとも言える。

3．釈迦から普賢への灌頂について

釈迦から普賢へ教説が委嘱されたことは，灌頂の後の教誡の言

葉からも読み取ることが出来る。普賢に対する一連の灌頂儀礼が終わると，それらを総括し，以下のような教誡の詞が語られる。

bcom ldan 'das shā kya thub pas kyang de'i tshe byang chub sems dpa' lag na rdo rje la bka' stsal pa/ rigs kyi bu de bzhin gshegs pa thams cad kyis dkyil 'khor 'khor los sgyur ba chen po'i rdo rje'i dkyil 'khor chen por lag *na (P;tu D) rdo rjes dbang bskur bas khyod dbang bskur to// ting nge 'dzin bye ba khrag khrig brgya stong du ma las byas pa'i rdo rje khyod la byin no// 'khor los sgyur ba'i rgyal po chen po'i rdo rjes khyod byin gyis brlabs so// rdo rje snying po thams cad khyod la dstan to// de bzhin gshegs pa thams cad kyis khyod *la (D;n.e. P) bstan pa thams cad kyi don bya ba dang bsrung bar gnang ngo// khyod kyi sngon gyi smon lam chen po yongs su rdzogs so// rigs kyi bu da rang gi rdzu 'phrul gyi cho 'phrul nges par ston cig/ rigs kyi bu lag na rdo *rjes (D;rje P) dbang bskur ba'i dkyil 'khor chen po shod cig/ (D ff.29v7-30r3, P f.30v3-6)

【試訳】世尊釈迦牟尼はまた，その時，金剛手菩薩に教誡した。「善男子よ，一切如来は，この大転輪者の曼荼羅である大金剛曼荼羅で，金剛手による灌頂によって汝を灌頂したのである。百千那由多倶胝ほど多くの三昧よりつくられた金剛杵を，汝に授けたのである。大転法輪王の金剛杵によって汝を加持したのである。一切の金剛心真言を汝に教示したのである。一切如来は汝に一切の教説の饒益と守護を許可したのである。汝の過去の大誓願が円満したのである。善男子よ，まさにいま，自らの神通神変を詳しく説け。善男子よ，金剛手

による灌頂の大曼荼羅を説け。」

この教誡の言葉を整理すると，釈迦から普賢への灌頂儀礼でおこなわれたことは，

1．一切如来が大金剛マンダラにおいて金剛手灌頂によって灌頂した。
2．三昧より作られた金剛杵を授けた。
3．金剛杵で普賢を加持した。
4．金剛の心真言を普賢に示した。
5．一切如来が教説の守護を許可した。
6．普賢の過去の誓願が円満した。

となる。そして，以上の六つの過程を経て普賢は金剛手となり，以降は「自らの神通神変を説くこと」と，「金剛手による灌頂の大曼荼羅を説くこと」をしなさいという文意である。実際に，経典に説かれる普賢が金剛手に転換する箇所では，普賢は金剛杵で加持され，金剛杵を与えられ，多くの心真言を授かり，最終的に金剛の教えを説く転輪者となることが確認される[10]。これは上記の2．から5．に相当すると考えられる。この場合の，5．の一切如来による金剛手の教説守護の許可は，教説を委嘱されたことと理解出来るであろう。普賢は教説が委嘱されたことにより，「毘盧遮那の過去の行を示す」という誓願[11]が成就するのである。

4．阿闍梨から受者への灌頂

では次に，阿闍梨から弟子への灌頂の場面を確認したい。

rin po che sna bzhi'i bum pa rin po che dang/ sman thams cad kyis bkang pa/ rin po che me tog dang/ me tog kun du rgyas pa dang/ 'od dpag med dang/ mi

'khrugs pa dang/ kun tu (P;du D) bzang po dang/ sgrib pa thams cad rnam par *sel (D;sil P) ba dang/ byams pa dang/ sa'i snying pos byin gyi brlabs pa dag gis spyi bor dbang bskur ro//

sngags pa pad ma dam pa der// rab tu bzhag nas bdag nyid kyis//

me tog spos kyis mchod byas la// mar me mchod yon dbul bar bya//

gdugs dang rgyal mtshan ba dan dang// sil snyan sgra rnams phyung pa dang//

rol mo'i sgra sil snyan mang gis// yang dag mngon du dga' byas la//

skyob pa kun gyi mngon sum du// bsgrims te de ni dbang bskur ro//

ji ltar gling bzhi'i dbang phyug go// 'khor *las sgyur (D;la bsgyur P) rgyal dbang bskur ba//

de bzhin sngags pas ngo mtshar dang// bkra shis kun gyis dbang bskur ro//

me tog rnams dang bdug pa dang// spos mchog rnams kyis yang mchod la//

lag pa g-yas su rdo rje dang// g-yon du 'khor lo bzhag nas su//

slob ma de la 'di skad du// rdo rje slob dpon khyod 'gyur te//

de nas rdo rje ldan pa khyod// rdo rje'i chos ni rab brjod pa//

sangs rgyas kun gyis khyod lag tu// ting 'dzin *byung (P;'byung D) ba'i rdo rje byin//

deng nas 'jig rten thams cad kyi// lag na rdo rje rdzu 'phrul che//
sdang ba rnams ni tshar bcad dang// dstan pa la ni gnod byed pa//
de dag gdul bar bya ba'i phyir// 'dren pa rnams kyis rdo rje *byin（D;byed P）//
ci ltar 'khor los sgyur pa'i rgyal// bdag por bya phyir dbang dskur ba//

（D ff.40v5-41r3, P f.41v2-8）

【試訳】一切の宝と薬で満たされ，宝幢と開敷華と無量光と阿閦と普賢と除一切蓋障と弥勒と地蔵によって加持された四宝の瓶によって，頭頂を灌頂すべし。

真言行者は妙なる蓮華に，彼を安置して，［阿闍梨］自ら，
華と香によって［弟子を］供養し，灯と閼伽を献じるべし。
傘と幢幡と，音を出す鐃鈸と，
多くの音色を出す鐃鈸によって歓喜させて，
全ての守護者の目の前で，注意深く彼を灌頂するのである。
四州の自在者のようである。転輪王の灌頂である。
同様に真言行者は，全ての希有と吉祥によって灌頂するのである。
花と焼香と，最勝の香によって，また供養して，
右手に金剛杵を，そして左[手]に法輪を置いて，
その弟子に次のように[述べるべし]。「金剛阿闍梨に汝はなった。
それ故，金剛杵を有するあなたは，金剛法を説くべし。
全ての仏が，汝の手に，三昧より生じた金剛を授けた。
今日より，一切世間の金剛手[たる汝]が，大神変をなし，
瞋恚者たちを降伏し，教説を害する

ものたちを調伏する為に，導師たちは金剛杵を与えた。
転輪王の如く，主とならしめんが為に灌頂したのである。」

この引用文によると受者は，宝幢・開敷華・無量光・阿閦の四仏，及び普賢・除一切蓋障・弥勒・地蔵の四菩薩によって加持された瓶水で灌頂が行われる。その後，右手に金剛杵を授与され，左手に法輪が置かれるのである。これはそれぞれ，普賢が金剛手となる時に授けられた金剛杵授与と，金剛手が転輪者となった時に授けられた大転輪心真言に相当すると考えられる。このように考えると，ここでの宝幢・開敷華・無量光・阿閦の四仏，及び普賢・除一切蓋障・弥勒・地蔵の四菩薩によって加持された瓶水で行われる灌頂は，一切如来による普賢への灌頂に相当するであろう。

釈迦から普賢へ	阿闍梨から弟子へ
・一切如来が大金剛曼荼羅において金剛手灌頂によって灌頂する。	・宝幢と開敷華と無量光と阿閦と普賢と除一切蓋障と弥勒と地蔵によって加持された四宝の瓶によって灌頂する。
・三昧より作られた金剛杵を授ける。 ・金剛杵で加持する。	・右手に金剛杵を授ける。
・金剛の心真言（大転輪心真言など）が授けられ，転輪者となる。	・左手に法輪を置く。

また，教誡の詞に注目すると，受者はこの灌頂を授かることによって阿闍梨となる。と同時に，金剛杵を授かった受者は，一切世間の金剛手として，普賢の灌頂の時と同様に二つのことを行うべきことが説かれる。

A．金剛法を演説すること。

B．大神変をなし，瞋恚者たちを降伏し，教説を害するものたちを調伏すること。

この行為は，そのまま金剛手の役割である「自らの神通神変を説くこと」と，「金剛手による灌頂の大曼荼羅を説くこと」に一致すると考えられる。そして，受者がこれら二つを行うことを命じられるということは，すなわち，釈迦から金剛手が相承した教えを，この灌頂儀礼によって受者自身も相承したことを表している。

釈迦――普賢→金剛手

⇓

阿闍梨――受者→金剛手

（転輪者）　　⇓

阿闍梨――受者→金剛手

（転輪者）

このように，阿闍梨たちが第二の金剛手，第三の金剛手，第四の金剛手というふうに，連綿と灌頂儀礼によってその教えを相承していくことがここに示されたのである。下線部の「転輪王の如く，主とならしめんが為に」という記述は，灌頂を受けた受者が金剛法を説く者となることを示していると言える。

5．瓶を加持する四仏・四菩薩の曼荼羅の配置について

では，なぜ『金剛手灌頂タントラ』では，瓶水を加持する尊格が宝幢・開敷華・無量光・阿閦・普賢・除一切蓋障・弥勒・地蔵の四仏四菩薩であったのだろうか。この問題に関して，以前別稿[12]でふれたことがあるが，今新たに別の意義を示していきたい。この四仏四菩薩が瓶の加持を行う尊格として採用された理由を考え

るにあたり，曼荼羅の構造を確認したい。『金剛手灌頂タントラ』は灌頂儀礼に際して以下のような三重の曼荼羅[13]が建立される。

・内院（八葉蓮台）
　中央…世尊大転輪者金剛手[14]
　八葉…宝幢（東）・開敷華王（南）・無量光（西）・阿閦（北）[15]
　　毘婆尸（Vipaśyin）（東南）・毘舎浮（Viśvabhū）（西南）
　　拘留孫（Krakucchanda）（西北）・尸棄（Śikhin）（東北）[16]
・二重
　八方…文殊（東）・金剛手（南）・虚空蔵（西）・観音（北）
　　普賢（東南）・除一切蓋障（西南）・弥勒（西北）・地蔵（東北）[17]
　四門…クヴェーラ天（東）・増長天（南）・広目天（西）・毘沙門天（北）
・外院
　一周…帝釈天や梵天をはじめとする諸天[18]

初期密教経典に見られる三部立ての曼荼羅が，東方に仏部，北方に蓮華部，南方に金剛部という配置を行う[19]のに対し，本経の曼荼羅がその法則に従わず，中心に金剛手，その周りに四方四仏と過去仏，二重は八方に八大菩薩が安置され，外院に諸天が配置される。このような配置に如何なる意義があるのかは以前に指摘した[20]ことがある。その要点をここで述べると，この曼荼羅は金剛手の役割である神通神変を表しているといえる。金剛手の神通神変は，一切如来によって教説の守護を許可された金剛手が，十地の菩薩以外の集会者たちを調伏することにある。つまり，神通神変を行う金剛手が曼荼羅の八葉蓮台の中心に安置され，金剛手に灌頂を授け許可を与えた一切如来を，四方四仏と過去仏を八葉蓮台に安置することで表し，調伏されることのなかった十地の菩薩を二重に配し，調伏された者たちが第三重に安置されるのである。

ではここで，以上のことも踏まえて改めて瓶水を加持する尊格を確認したい。瓶水を加持する宝幢・開敷華・無量光・阿閦の四仏，及び普賢・除一切蓋障・弥勒・地蔵の四菩薩は，曼荼羅ではちょうど八葉蓮台の四方と，二重の四角に配置されているのである。

・四方……宝幢(東)・開敷華王(南)・無量光(西)・阿閦(北)
・四角……普賢(東南)・除一切蓋障(西南)・弥勒(西北)・地蔵(東北)

曼荼羅上では，これらの四仏は一切如来の表示を担い，四菩薩は十地の菩薩の表示を担っていた。このことから考えると，瓶を加持する四仏四菩薩は，一切如来と十地の菩薩に相当し，四仏四菩薩による瓶水の加持は，一切如来と十地の菩薩による加持となるであろう。

普賢への灌頂においては，一切如来による灌頂や金剛杵の授与があり，それによって一切如来に教説守護を許可された。これを象徴的に表す為に四仏の加持があると考えられる。また，四菩薩は，神通神変において調伏されなかった存在であり，曼荼羅中の諸尊である。そのため，ここでは曼荼羅中の諸尊の役割として，瓶を加持したものと考えられる。即ち，八葉の諸尊を四仏が代表し，四菩薩が二重の諸尊を代表することで，曼荼羅の諸尊全体の灌頂と言えるであろう。

6．まとめ

以上，小稿では『金剛手灌頂タントラ』の灌頂の目的を探り，その目的のために行われる灌頂儀礼の実際を示し，そこにどのような意義があるのかを考えてきた。

灌頂の目的に関しては，一義的には釈迦の教えを相承しそれを絶やすことなく伝えていくことであった。そして副次的には，その役割を担う金剛手に転換させることと言える。また，その背景には金剛手が釈迦の教説を相承している正当性を示すことも含まれていたように思われる。

さて，金剛手が灌頂される場面は，一切如来からの灌頂と，金剛杵の授与と，心真言伝授などがあった。それを，阿闍梨から弟子への儀礼と対応させると，

一切如来による金剛手灌頂――四仏四菩薩で加持した瓶水の灌頂
金剛杵の授与　　――金剛杵の授与
大転輪心真言の授与　　――法輪の授与

という対応関係が見られた。この対応関係から，瓶水灌頂は教説の委嘱を行うこととも関係しているように思われた。そこで，阿闍梨から弟子への瓶水灌頂の場面を確認したところ，瓶水の加持は宝幢・開敷華・無量光・阿閦の四仏，及び普賢・除一切蓋障・弥勒・地蔵の四菩薩によって行われていた。この四仏四菩薩は，本経の曼荼羅においては，それぞれ一切如来と十地の菩薩を表している。つまり，この四仏四菩薩で加持された瓶水によって灌頂が行われることは，灌頂の目的，及び釈迦から普賢への儀礼と対照させることによって，

1．教説の委嘱
2．一切如来による許可

という二点の意義を見いだすことができるであろう。その結果，普賢が金剛手へと転換したように，受者も金剛手へと転換するのである。それには，金剛杵授与が大きな役割を担っていたことは言うまでもないが，瓶水灌頂も重要な役割を果たしていたと言

える。

以上

参考文献

＜略号＞

D　デルゲ版チベット大蔵経
P　北京版チベット大蔵経
Toh　東北帝国大学法文学部編　西蔵大蔵経総目録
Ota　大谷大学監修　影印北京版西蔵大蔵経　総目録
『大正蔵』　『大正新修大蔵経』

1.　一次文献

・『金剛手灌頂タントラ』

Lag na rdo rje dbang bskur ba'i rgyud chen po
（*Vajrapāṇyabhiṣekamahātantra.*）D: Toh.496, P: Ota.130.

・『大日経』

『大毘盧遮那成仏神変加持経』（『大正蔵』No.853, vol.18）
rNam par snang mdzad chen po mngon par rdzogs par byang chub pa rnam par sprul pa byin gyis rlob pa shin tu rgyas pa mdo sde'i dbang po'i rgyal po zhes bya ba'i chos kyi rnam grangs.
（**Mahāvairocanābhisaṃbodhi- vikrvitādhiṣṭhāna- vaipulya-sūtrendra -rājo nāma dharma-paryāya*）D: Toh.494, P: Ota.126.

2.　二次文献

伊藤堯貫（善之）
(1994)「『金剛手灌頂タントラ』の一考察」『智山学報』43, pp.(1)-(15)
(1997a)「『金剛手灌頂タントラ』における金剛手灌頂について」『印度学仏教学研究』45（2), pp.868-866(pp.(175)-(177))
(1997b)「『金剛手灌頂タントラ』の曼荼羅について」『密教学研究』29,

pp.53-71
(2013)『金剛手灌頂タントラ』高橋尚夫他編『初期密教　思想・信仰・文化』 春秋社，pp.107-117
大塚伸夫
(1995)「『金剛手灌頂タントラ』における曼荼羅行について」『豊山教学大会紀要』23，pp.312-272(pp.(13)-(53))
(2013)『インド初期密教成立過程の研究』春秋社
駒井信勝
(2014)「初期密教灌頂儀礼にみられる瓶の加持について」『密教学研究』46，pp.(83)-(101)
(2015a)「『金剛手灌頂タントラ』の曼荼羅の中尊について」『智山学報』64，pp.(1)-(12)
(2015b)「『金剛手灌頂タントラ』の曼荼羅の意義について」『現代密教』26，pp.(61)-(80)
酒井真典
(1962)『大日経の成立に関する研究』高野山出版社
(1973)『修訂　大日経の成立に関する研究』国書刊行会
田中公明
(2010)『インドにおける曼荼羅の成立と発展』春秋社
種村隆元
(2013)「密教とシヴァ経」『シリーズ大乗仏教10 大乗仏教のアジア』春秋社，pp.73-102
元山公寿
(2005)「中期密教における真言について―『金剛手灌頂タントラ』を中心として―」『日本仏教学年報』70，pp.153-167
頼富本宏
(1996)『密教仏の研究』法蔵館

註

1　ただし，本経に説かれるごく一部が，不空訳『金剛手光明灌頂経最

勝立印聖無動尊大威怒王念誦儀軌法品』（大正蔵 No.1199 Vol.21）の冒頭部分と一致することが報告されている。伊藤（2013, p.113）参照。またその内容については，駒井（2015b, pp.65-68）参照。

2　酒井（1973）は，タントラ四分類法において，『金剛手灌頂タントラ』が『大日経』と同じ行タントラに配されてものと，Bodhyagra のように所作タントラに配しているものの二つの立場があることを確認し，みる人によって所作タントラとも行タントラも分類できることから，本経を『大日経』以前に成立したとする立場にたって考察をしている（酒井1973, p63）。そして，「五字厳身観」（pp.50-59）や「三句の法門」（pp.59-65），また「如実知自心」（pp.65-71），曼荼羅（pp.157-196），灌頂儀礼（pp.196-209）など，多くの点で本経と『大日経』に類似点があることを示している。

3　大塚（2013, pp.987-988）参照。

4　大塚（2013, p.985）では，以下の三点からその評価を導き出している。

・教誡の言葉の内容をみると，受者である大乗の菩薩が金剛手菩薩として位置づけられている。

・金剛杵を授けることで，その者にとっての普賢行が円満される結果になる。

・金剛手灌頂は「普賢行願」と「入法界」を無時間のうちに完成させ，真言門の菩薩・執金剛として確立させることを意図した灌頂儀礼である。

5　伊藤（1997a, p.866），及び大塚（2013, p.985）などがある。

6　ここでの八大菩薩は「普賢菩薩・弥勒・文殊・観自在・除一切蓋障・虚空蔵・地蔵・除一切悪趣」であるが，灌頂の曼荼羅に画かれる八大菩薩は，「文殊・金剛手・虚空蔵・観音・普賢・除一切蓋障・弥勒・地蔵」である。本経には，二系統の八大菩薩が見られる。

7　『大日経』にもその教説が仏説でないとの批判を受けていたことを暗

示する一説が見られることが種村（2013）に報告されている。【書き下し文】秘密主よ，未来世に於いて，劣慧・無信の衆生は，是の如きの説を聞きて信受すること能わず。慧無きを以ての故に而も疑惑を増す。彼，唯だ聞く如くのみに堅住して修行せず。自ら損じ他を損じ，是の如きの言を作さん。彼の諸の外道に是の如き法あり。仏の所説に非ずと。（『大正蔵』vol.18, p13c）【蔵訳】de la gsang ba pa'i bdag po ma 'ongs pa'i dus na sems can blo zhan pa ma dad pa gang dag bstan pa 'di la dad par mi 'gyur zhing yid gnyis dang som nyi mang ba/ thos pa tsam snying por 'dzin pa/ sgrub pa la mi phyogs pa dag 'byung bar 'gyur te/ de dag ni bdag nyid kyang ma rung la gzhan yang phung bar byed pa yin no// 'di skad du 'di ni phyi rol pa rnams la yod de/ sangs rgyas rnams kyis gsungs pa ni ma yin no zhes smra par 'gyur gyi//（D f.177r1-3, P f141r4-5）【試訳】「秘密主よ！未来においては，智慧が劣り信がない衆生は誰であれ，この教えを信じず，異議を唱え，大いに疑うであろう。そして，ただ［教え］を聞くだけで，心髄を持ち実践に向かうことはないであろう。彼らは自身も滅ぼし，他の人も破壊するであろう。［そして］次のように「これは外教徒たちが有するもので，諸仏が説いたのではない」と言うであろう」

8　例えば，zhi ba'i blo gros khyod kyis ma dad pa su la yang dkyil 'khor gyi rgyal po 'di ma bstan cig/ dam tshig 'di yang yongs su dag pa ma gtogs pa su la yang ma sbyin cig/（D ff.105v7-106r1, P f.106r1-2）【試訳】「寂慧よ！汝は信がない者には誰であれ，この曼荼羅を示してはいけない。この三昧耶もまた，清浄な者たちを除いては与えてはいけない」などがある。

9　『金剛手灌頂タントラ』に時代的にも内容的にも近く，金剛手が教えを説く経典には，例えば『蘇悉地羯羅経』（『大正蔵』No.893）や，『蘇婆呼童子請問経』（『大正蔵』No.895）などがある。

10　大塚（1995, pp.300-292），大塚（2013, pp.962-965），駒井（2015a, pp.(5)-(9)）参照。

11 『金剛手灌頂タントラ』に見られる普賢の誓願とは，毘盧遮那の過去の行を示すことである。de'i tshe byang chub sems dpa' sems dpa' chen po kun du bzang po zhe bya ba'i 'jig rten gyi khams me tog gi gzhi'i snying po'i rgyan bkod pa 'di thams cad du bcom ldan 'das rnam par snang mdzad kyi sngon gyi spyod pa ston（D;bstan P）par smon lam btab nas（後略）…。(D f.17v3-4, P f. 18r3-4)【試訳】「その時，普賢菩薩摩訶薩という，この華厳荘厳世界全てに於いて，世尊毘盧遮那の過去の行示せんと願を立てて（後略）…。」

12　駒井（2014）では，この四仏が内院の八葉蓮台の四方，四菩薩が二重の四角に配置されることから，それぞれ内院と二重を代表する尊格であることを示し，結果曼荼羅の諸尊全体による加持であることを指摘した。(駒井2014, pp.94-96）参照。

13　本経の灌頂儀礼の曼荼羅に関しては，伊藤（1997b），及び田中（2010, p.120）参照。

14　本経の灌頂儀礼の曼荼羅の中尊に関しては，「毘盧遮那説」と「金剛手説」の二つがあったが，『大日経』「秘密曼荼羅品」に説かれる金剛手の尊像と，本経の中尊の尊像にかんする記述がほぼ一致することを確認し，この曼荼羅の中尊が金剛手であることを指摘した。(駒井2015a）参照。なお，本論でも曼荼羅の中尊を金剛手とする立場で論を進めていく。

15 『金剛手灌頂タントラ』の四方四仏に関しては，頼富（1996, pp.118-128）参照。

16　八葉蓮台に過去七仏が画かれることに関しては，大塚（2013, p.966）参照。そこでは，過去仏が画かれる背景に，この曼荼羅が遙かな過去より存続した経典作者の意図が含意されているとしている。

17　ここに画かれる八大菩薩の系譜については，頼富（1996, pp.118-128）

参照。

18　最外院に配置される諸天は凡そ五十九尊で，紙数の都合上その全てを記すことはできなかった。全ての諸天に関しては大塚（1995）・伊藤（1997b）参照。

19　初期密教の曼荼羅に見られる三部立ての配置については，田中（2010, pp.83-102）参照。

20　駒井（2015b）参照。

〈キーワード〉金剛手灌頂タントラ・灌頂・金剛手